

鬼と仏と

住友を破壊した男・伊庭貞剛

第十回

江上 剛

第十章 宰平辞任

1

貞剛ていこうは、別子銅山べっしの煙害問題、従業員そうじようの反発や農民たちの騷擾そうじょうを鎮静化さいへいさせることに加え、宰平さいへいの問題を解決しなければならなかった。

宰平さいへいの問題とは、大島供清おほしまきよが宰平の退任を求めて激しく住友を攻撃こうげきしている事態を收拾しうじさせることだ。

貞剛ていこうは、新居浜にい はまの支配人宅てんりゆうじに天龍寺てんりゆうじの峩山がざんを迎えていた。陣中見舞いと称して、わざわざ新居浜に来てくれたのである。

夜の席――。心づくしの料理が膳に並んでいる。貞剛は峩山と食を共にしながら、久しぶりに寛いだ時間を過ごしていた。

峩山は、徳利を抱え込み、先ほどから手酌で飲み続けている。

「別子行きに際して、品川殿に手紙を書きました」

貞剛が言った。

「何と書かれましたかな」

峩山が聞く。杯は離さない。

「別子の山に虫がわいたそうだと書き送りました」

「虫、ですか。それは面白い」

「まさに虫です。村の人たち、山で働く人たちと、住友の者との間で言葉が通じなくなっております。虫がわいているのです。精神が腐敗し、虫がうじゃうじゃとわき、天地正大の気が流れるのを妨げております」

貞剛は、若き頃、命を懸けた尊王攘夷運動を思い出し、水戸藩の国学者藤田東湖が詠んだ「正気之歌」にある「天地正大の気」という表現を使った。

「天地正大の気、粹然として神州に鍾まる。秀でては、不二の嶽となり、巍々として千秋に聳ゆ、注いでは大瀛の水となり、洋々として八洲を環る……」

峩山は目を閉じ、「正気之歌」を吟じた。

貞剛は目を閉じ、それを聞く。今まさに気が満ち、体の中に流れ込んでくる感覚を覚える。かつて死を顧みず、西川吉輔よしすけの命によって京の護りに駆け付けた時の記憶が戻る。いつも自分は、後先を考えず行動してしまう癖があるようだ、と我ながらおかしみを感じてしまう。

「天地正大の気を流すためには、何が必要だと思われる」

峯山が聞く。

「お教えください」

貞剛は頼む。

「あなたの言葉と行動で、従業員の方々や村民たちと対話することだ」

峯山は断じる。

「どうすれば対話できますか。言葉と行動とは？」

貞剛は尋ねる。

峯山はひと息入れるように酒を飲み、「愚」と言った。

「愚？」 貞剛は首を傾げる。かし

「愚は究極の英知でありましょうな。巧智こうちを弄ろうさず、名聞名利みやうもんみやうりを求める心を排し、ひたすらに歩き、語ることでしょう」

峯山はまた盃さかずきを干した。

「愚……。よい言葉をいただきました。私は、行きがかり上、他の

者に任せるわけにもいかず別子の山に來ましたが、特に虫退治の勝算があるわけではありません。私自身が虫の原因でもある幸平殿の縁戚でありますから、どのように対処していいやら迷うことでしょう。果たして『愚』に徹し切れるかどうか……」

貞剛は弱気な表情を見せた。

峩山は、何も言わず酒を飲んでゐる。

「一步誤れば、二百余年の別子の歴史は虫に喰い散らかされるでしょう」

貞剛は、腹に力を込め、峩山を見つめる。

「して、貞剛殿の覚悟は？」

酔眼で峩山が聞く。

「私は、天地正大の氣の力を借りて、一身を賭して従業員や村の人々との意思疎通に努めるつもりです。大阪には戻らず、妻を捨て、子を捨て、家を捨て、家財を捨て、一身を捨ててこそ初めて自由に働くことができるのではないかと思っています。こうして誠心誠意を込めて働けば、虫も気にはならないでしょう。別子の鬼ともなるべし、又仏ともなるべしと決意しております」

「して、幸平殿への対応は？」

峩山が突いてくる。

「引退を促す所存です。甥おいだからできることもあります」

貞剛はきっぱりと答えた。

「鬼も仏も、元をただせば一つです。宰平殿にとっても、あなたは鬼であり、仏であるうな」

「そのつもりでおります。宰平殿が引退されれば、大きな虫も消えるのではないでしようか」

貞剛の目が光る。

「大島供清のことですかな」

峯山が小首を傾げる。かし

「その問題については、家長友純様とともいが最も心を痛めておられます。住友を今日の発展に導いた宰平殿を切らねばならないのですから」

「切らねば、住友の醜聞スキャンダルは全国に拡大する可能性があるからですな」

「おっしゃる通りで、大島の攻撃は留まるところを知りません」

「して、煙害対策は？」

さらに峯山は問う。

「塩野門之助を戻そうと思っております」しおのものすけ

この時ばかりは、貞剛の顔がほころんだ。あの筋を通す真つすぐな性格の技術者と、もう一度働くことができるかと思うと、嬉しくてたまらない。

「ほほう、塩野君を。彼は、宰平殿に解雇されたのでしたね」

「ええ、中央精錬所構想で衝突したのです」

塩野は、フランスで鉱山技術を学び、別子が銅を産出しなくなっても海外から銅鉱石を輸入し、精錬する、中央精錬所を建設することを提唱したのだが、別子こそ住友の命と考える幸平は、別子の銅が尽きるという事態を考えることを拒否し、塩野を解雇した。塩野は、その後、足尾銅山に移った。

「塩野君を呼び戻して、何をさせるのですか？」

「ははは」貞剛は小さく笑い、「思い通りに仕事をさせようと思いません」と言った。「そして新居浜製鉄所、山根精錬所なども廃止します。

幸平殿が欧米からお戻りになり、鉄を造ると言い出されて造った設備ですが、煙害を拡大するだけで、住友のためにも、村の人々の為にもなりません」

「貞剛殿、まさに鬼ですね。幸平殿に繋がるものを全て否定されようとしている」

峯山は、感に堪えない表情をした。

「いいえ、私は、幸平殿を誰よりも尊敬しています。しかし幸平殿は偉くなられ過ぎた。誰も諫言かんげんしない。私は、幸平殿の甥、幸平殿の配下である前に住友の人間です。住友が未来永劫えいじょう続くために命を投げ出す覚悟なのです。元々、国に捧げささげようと思っていました。惜しくもなんともありません。幸平殿には鬼になるかもしれません

が、住友には仏であります」

「先ほども申したが、鬼も仏も軌は一ですぞ。鬼神の如く振る舞われるがよい。結果は求めないでよい。臨濟も『もし仏を求めようとするれば、その人は仏を失い、もし道を求めようとするれば、その人は道を失い、もし祖師を求めようとするれば、その人は祖師を失うであらう』とおっしゃっています。何も求めず、ひたすら鬼神の如く、振る舞うことです」

峩山の言葉に、貞剛は深く感じ入った。

「さあ、明日はお山に登ります。もう遅い。酒宴はこれくらいにして眠ることにしましょう」

貞剛は言った。

「そうでありましたな。あまり寛いので随分と酒が進みました。

明日は、この酒を汗で流すことにしましょう」

峩山が答えた。

貞剛が手を叩くと、お光が現れて、膳を片付け始めた。

明日は、お光の弟小吉の案内でお山に登る。

「あら、お坊さん、もういびきをかいておられる。こんなところで寝ては風邪を引きます」

お光が驚いた顔を、貞剛に向けた。

峩山は、大きな体を横たえ、豪快な寝息を立てていた。まるで天

衣無縫いむほうな子どものようだと貞剛ていこうは微笑ほほえましく、その寝姿を見ていた。

2

友純は、わずかにいら立ちを覚えていた。焦りから来るものだろうと冷静に分析してみる。性格的には自分でも激するところがない穏やかな人間であると思っている。これはなにも住友の家長だからというのではない。生来のものだ。

ところがどうもよくない。気分がすぐれない。落ち着かないのだ。この須磨すまの別邸の広々とした庭を眺め、遠くに波音を聞いていても一向に落ち着かない。いったい如何いかしたものだろうか。

原因として考えられるのは貞剛が身近にいないことだ。貞剛は、友純を口説き落とし、住友の家長に据えた。そのためなにかと頼りにしているのは事実だ。

しかし別子銅山における従業員や坑夫たちの離反、煙害による農民たちの騒擾などの問題を解決するために、貞剛は別子に行ってしまった。

誰も行く者がいないために、火中の栗を拾ったのだ。手紙で状況を知らせてくれたり、時折、大阪に戻ってきてはくれるが、以前ほ

ど頻繁に顔を合わせる事がなくなったのは仕方がないことだ。

今、一番、頭を悩ませているのは元理事の大島供清のことだ。

大島は、宰平に対する恨みが尋常ではなく、貞剛が別子に赴任する直前の明治二十七年（一八九四年）六月十八日に友純宛に上申書を提出してきた。

内容は痛罵つうばと言っているほど宰平を非難している。

——ちくねんほうしせんおう逐年放恣専横見るに忍びざるものあり。

宰平は、当初は、家長に忠実だったが、最近はなはは専横が甚だしい。辞任せよと迫ったが、家長や重役陣が認めないので、未だに総理人として君臨している。そこでこの上申書を提出すると大島は書く。

大島が挙げる宰平の罪状は次のようなものだ。

故友親ともちかが酒におぼれ、病気になったのは宰平の専横に悩んだためである。まるで友親の死の責任は宰平にあると言っているようなものだ。

宰平は自分の親族を住友の要職に就けており、このままだと住友は宰平の親族に乗っ取られてしまうとの懸念を表明する。

貞剛もそうだが、前支配人の久保も宰平の親族である。こうした人事が不公平だと不満を募らせているのだ。

これだけでもかなり攻撃的なのだが、もっと驚きの内容が書かれている。

大島が宰平に会った際に次のように言ったという。

「家長には定まった仕事がないので、大阪近郊に植物園を作り、その責任者になられてはと申し上げたら、それは良い考えたとおっしゃったので、大島はその植物園で家長のお世話をしたらどうか」

大島は、よく考えておくと言葉を濁したのだが、これは友純をなすがしろにしようとする宰平の策略であると断じ、憤慨ふんがいしている。

友純は、確かにそのようなことを宰平から聞いたことはあるが、決して自分をないがしろにしようとする宰平の策略だと、邪推じやしういはしなかった。

そのほかにも多々、宰平の行動への非難を書き連ね、「暗々に広瀬党とも称すべきものを組織し、畏れ多くも住友家の資産を種々の名義を設けて取り付けつつあるということを憚はばからざるなり」と宰平を糾弾きゆうたんし、宰平と久保の退任に賛同する者を募るといふ。騒ぎは大きくなるばかりだ。

問題が複雑なのは、大島に反感を持つ者ばかりではないということだ。別子銅山の幹部や本店の重任局、すなわち重役陣の中には大島に賛成し、宰平の独断専行をこころよく思わない者もいる。

この事実が大島の行動を後押ししていた。

もうすぐここに貞剛が来る。貞剛が来れば、忌憚きたんなく宰平のことについて相談したい。

貞剛が、別子銅山から書き寄こした手紙によると、煙害の問題なども全て幸平の問題に帰するようだ。

煙害は、叔父である西園寺公望をも煩わせている。

住友家の問題なので口は挟まないが、重大な問題になるかもしれないので幸平と十分に相談するようにと西園寺は言う。

西園寺の懸念は現実化した。貞剛が別子に入った直後の七月に大規模な騒擾が発生し、けが人や逮捕者を出してしまった。

もはや住友だけでは手に負えない事態になりそうな心配さえする。いったい貞剛はどんな手を打とうとしているのか。

思い余って友純自ら、この須磨の別邸に大島を呼んだことがある。大島という男のことはよく知らないが、幸平が一時は見込んだ優秀な技術者であることから、諄々と諭せば、分かってくれるはずだと思っただ。

その際の、慇懃無礼な大島の態度を思い出す度に、不愉快さが蘇ってくる。

大島は、貞剛が赴任したにもかかわらず別子銅山で騒擾が発生したことで、意を強くしたのだろう。幸平を退任させねば、ますます問題は大きくなり、住友の事業は最悪の結果を招くかもしれないと、ふたたび上申しようとしていた。

友純の目の前に神妙に正座した大島が顔を上げると、目だけが異

様に粘り気を帯びた光を放っていた。それを見て友純は、悲しみを覚えた。幸平に対する憎しみに心が全て支配されている。他人を憎むことに人生を捧げることほど、無意味なことはない。

「今まで住友によく尽くしてくれた。ありがたく思います」

友純は、できるだけ穏やかに話しかけた。

大島は、体を固くし、首を深く垂れた。

「あなたが幸平総理人を退任させたいという思いは、十分に理解した。その件については、私や重任局に任せてくれないか」

友純の話を遮るように大島は顔を上げ、興奮のために赤く充血した目で睨み返す。

「お言葉ではございますが、十分にご理解いただいているとは思いません。一刻も早く広瀬を退任させねば、家長様の立場まで危うくなることは必定であります」

大島は強い口調で言い放った。

友純は、その勢いに一瞬、たじろぐ。しかし気持ちを立て直して、「あなたの思いを受け止め、善処することを約束する。どうか上申書を取り下げてはくれないか。友純、伏してお願います」と低頭した。

さすがに家長に頭を下げられた大島は、このまま強引に上申書を差し出すわけにはいかず、一旦は取り下げたのである。

友純は、これで大島も矛を収めるだろうと安堵し、叔父・西園寺公望や貞剛と、宰平の処遇について協議を重ねた。

そして大島の怒りを抑えるためには、宰平を穩便に引退させるしかないだろうという結論に達したのである。

しかし、友純の予想は甘かった。見事に大島に裏切られた。

大島は、宰平の問題を住友の醜聞スキャンダルとして外部に公表したのである。

明治二十七年十月十七日、愛媛新報に「大阪の富豪住友家の大怪聞」という三段抜きの記事が掲載された。

内容は、別子銅山前支配人久保盛明が、叔父広瀬宰平の権力を笠に着て評判が悪く、また宰平の専横が著しいこと。別子銅山での農民たちの騷擾が一向に収まらないこと。最悪は、忠隈炭鉱買収に絡んで宰平が前鉱山局長と組み、自己の利益を得ようと謀ったというものだ。

この記事は、地方紙から東京開花新聞に転載され、広く東京人の知るところとなり、疑いをかけられた前鉱山局長が、住友に抗議する事態となった。

事態は、もはや住友内部に留まらず東京にまで拡大し、政府の要人である前鉱山局長を巻き込むまでに拡大することとなった。

ここに来て友純は、貞剛と協議し、宰平に引退を迫ることにした

のだ。

貞剛は、鰻谷うなぎたにの住友本社で宰平と向き合った。貞剛は、多忙な中、別子からこの面談のために大阪にやってきた。

友純は、叔父甥の関係でつもる話も多いことだろうと、その場への同席は控えた。

後に貞剛から受けた報告によると、話し合いは不調であった。

大島おおいごときに言われて、総理人を辞任できるか。宰平は、怒髪天どはつてんを衝くという表現がぴったりだったらしい。

貞剛は、このままだと宰平の名誉が傷つき、晩節けがを汚すことになるかと速やかな辞任を促したのだが、宰平は納得しない。

これまでの住友への貢献をつらつらと並べたて、自分が家長をないがしろにし、住友を篡奪さんだつしようとしているなど、ありえない。もしこのまま辞任すれば、大島の言説を認めたことになる。それは納得できないと言う。

貞剛の報告を聞き、友純は涙を流した。「悔しいだろう」と友純は言葉を洩らした。これまでの宰平の住友に対する貢献を考えれば、宰平が納得できないということは、痛いほど理解できる。

貞剛は、「申し訳ありません」と言い、いかにも疲労困憊こんぱいしたような表情になった。友純は、貞剛のあのような悲痛な表情を見るの

は初めてであり、非常に驚いた。冷静沈着な貞剛といえど、世話になつた叔父に引退を迫るのは、余程辛かつたのだろう。

「何度でも説得いたします」

貞剛は言った。

しかし、事態はますます混乱し始めたのである。

大島は、まるで脅迫でもするかのようにしつこく宰平に面談を求め、辞任を要求するに及んだのである。

宰平は、帰れ！ と怒鳴りつけ、大島を追い返したのだが、それがさらに大島の怒り、憎しみに火を点けた。

大島は、最後の手段であると、総理大臣伊藤博文、農商務大臣榎

本武揚に宰平糾弾の書を送りつけると言い、同時に別子銅山のある伊予で糾弾の演説会を催し、新聞で広告も出すと通告してきたのである。

この事態が国家の問題になれば、別子銅山の管理そのものが住友の手から奪われることさえ懸念せざるを得ない。

貞剛は、このことを友純から聞くや否や、ふたたび別子から帰阪し、今夜、この須磨の別邸で大島と会う決断をしたのである。

「伊庭様がお見えになりました。大島様もご一緒です」

女中が伝えにきた。

待ちに待った貞剛が到着した。胸の痞えが、すっと消え去るかの

ようにすっきりとした気分になった。

それにしても遅かったではないか。約束の時間など、とつくに過ぎて
ぎている。

なぜ大島と一緒になのだろうか。ここで貞剛と大島と落ち合うこと
になっていたのだが、偶然、玄関で一緒になったのだろうか。

一抹の不安が頭を過ぎった。

「座敷に通してください。すぐに参ります」

友純はあれこれと考えるのをやめて、座敷に急いだ。

3

貞剛は神妙な表情で友純と向き合っていた。その傍には、いかに
も意気消沈したかのように、力を落とした様子で大島が座っている。
視線はどこか定まらぬ様子で、浮ついたままだ。

「ご報告申し上げます」

貞剛が、背広の胸から取り出したものは一本の短刀だった。貞剛
は、それをテーブルの上に置いた。

「それは？ 如何なされた？」

友純は、目を見張った。白木の鞘に納められ、中の刀身は見えな
いが、柔らかな曲線を描き、素朴ながら美しさを放っている。

「我が、伊庭家先祖伝来の短刀でございます。私が戊辰ぼしんの戦いに参るために京へ上りました際、持参したものです」

貞剛はきりりと引き締まった表情で説明した。

「それがどうしてここにあるのですか」

友純は、貞剛の意図が掴めず動揺を隠せない。

「実は、本日、友純様とのお目通りする前に、離れをお借りしまして大島殿とお会いしたのです」

貞剛は、静かに語る。

「なんと、それは本当ですか」

友純は、言葉が続かないほど驚いた。それで約束の時間に大幅に遅れたのか。

「私もお山に参りました、人心の乱れが相当なものであることは実感しております。私なりに努力いたしておりますが、これを旧に復するには、まだまだ時間が必要と思われます。その時間を少しでも短縮するには、大島殿の問題を解決することが先決と思ひ定めております。そこでじっくりと大島殿の要請を伺うかがったわけであります。短刀は、その際、私の覚悟を示すために大島殿と私の間に置かせていただきました」

貞剛の視線が鋭く友純を射抜く。普段、これほどの迫力を感じたことはなかった。友純は、冷や汗が滲にじみ出る思いがする。ある種の

恐怖を感じていると言っても言っていない。これが明治という新しい世を作るための捨て石ならんとした者の覚悟なのだろう。死を賭して、大島を説得したに違いない。

「それでどうなりました」

ようやく息を整え、友純は聞いた。

貞剛は、隣に座る大島を一瞥いちめつした。「大島殿はようやく納得してくれました。望みは一つ。宰平殿の早期退任であります。私も、それがよかろうと思っております。人心が、すでに宰平殿から離れている現状があるのは事実であり、今日のお山の状況、煙害などの問題を考えます時、経営の実質的な責任者である宰平殿が責任を取られるのは、誰しもが納得することではありません。私は、大島殿に、命に代えて」貞剛は、短刀に視線を向けた。「宰平殿に早期退任していただくことを約束いたしました。大島殿は、それで納得されたのです。そうでありますね」

貞剛に促され、大島はようやく我に返ったのか、真剣な表情で無言のまま低頭した。

「つきましては、宰平殿に対して総理人の『依願解雇』の辞令をいたしましたのであります。その書は、私が責任をもって宰平殿にお届けいたします」

貞剛は、強い口調で言い切ると、低頭した。

「大島殿、重ねて聞くが、それで良いのですね」

友純は、貞剛の迫力に押されながら大島に聞いた。

「はっ、宰平殿の早期退任が叶いましたならば、私は住友家に弓を引く気持ちなど全く持つておりません。これまでの数々の失礼、無礼の段をお許しいただきたく思います」

「それはなりません」

友純が、決然と言い放った。

大島は驚き、友純を見つめる。

「これからは住友とは完全に縁を切っていただきます。功ある宰平殿に辞任していただくのなら、あなたも身を退くのは当然のことでしょう」

友純の強い口調に、大島は、以前より神妙な表情になり、「分かりました」と低頭した。

「良き処断であると存じます」

貞剛は、目を細め、友純の決然とした態度を評価した。

友純は、秘書に墨と紙を運ばせた。姿勢を正し、貞剛と大島を見つめた。そして墨を磨^すり、自分の好みの濃さにすると、筆を執った。

「――長年の功勞により特に終身分家の上席に列し、前職の資格を以て礼遇候事」と記した。封書の表書は願い出により解雇するとの意味で依願解雇とした。

「では貞剛殿、これを幸平殿に渡してくださいませ。納得されたら、後日、私も会う。くれぐれもよろしく頼みます」

「確かに預かりました。幸平殿の住友を愛する気持ちは、他の人の何倍も強いと存じます。謹つとんでこの辞令をお受けになることと存じます」

「これまでの貢献については感謝いたします。しかし残念ながら今後は住友に係することは禁じます。そのことを天下の人々に公表するが、良いか」

友純は大島に聞いた。口調は極めて穏やかだった。

「はっ、謹さんでご沙汰さたをお受けいたします。これからは身を慎みつつ、住友の発展を陰ながら祈念してまいります」

大島は、深く低頭し、しばらく頭を上げなかった。

貞剛は、その目に涙が光っているのを見逃さなかった。

どのような経緯があったか詳しくは知らないが、幸平を憎み、貶おとしめることに生きがいを感じてしまったことは哀れなことだと貞剛は深い悲しみを覚えた。

貞剛は、大島と対峙し、その前に短刀を置いた。そして主家あだに仇を為すことは、死に値することである。お前が腹を切るなら、私も切る、と幸平糾弾の行為をやめるよう迫った。大島は、あつけにとられたような表情をしたが、貞剛の覚悟おにお圧され、「幸平殿が腹を

切られるなら」と言った。貞剛は、「間違いなく辞任していただく。もし違うようであれば、この貞剛が死を以て謝す」と答えた。

——大島は折れたが、次は宰平殿を説得しなければなるまい。難儀なことよ。

貞剛は、声にならない声で自らに呟いた。

4

「小吉、たくさん植えるんだぞ」

貞剛は、杉の苗を山の斜面に植える。

「うん、おじさんもね。坂が急だから転がらないでね」

小吉が弾んだ声で言い、額の汗を拭う。

「こら、小吉。支配人におじさんなんて言うんじゃない」

山林課長の本荘が叱る。

「そうですよ。小吉、失礼です」

姉のお光も叱る。

「だっておじさんはおじさんだもの」

小吉が、べそをかく。

「よい、よい。おじさんでよい。いつも小吉にはお山へ行くのに助けてもらっているからな」

貞剛が言い、腰を伸ばす。

本荘の指導の下、ようやく本格的な杉やヒノキの植林が始まった。雪も解け、五月の明るい太陽が別子の山々の斜面を照らしている。しかし陽光が当たれば当たるほど、赤茶けた土がむき出しになった山の斜面の悲惨さは残酷なまでに際立っている。

別子銅山が所有あるいは借用している、薪炭しんたんなどを確保するため、の山林は六万六二二五町歩。内訳は、所有山林六二〇二町歩、他は、国からの借用山林である。国からの借用は江戸幕府由来の第一備林二万二五三町歩、明治政府由来の第二備林三万七四七〇町歩となっている。

ちなみに六万六二二五町歩とは、東京ドーム約一万四千個分となる。

山林は別子銅山がある愛媛県側からばかりでなく、高知県側にまで広がっている。広大な範囲を管理し、それらの木々を枯らし、伐採しつくしていたのだ。

これまで住友でも、植林を行っていなかったわけではない。山林を借用する際の条件として植林が義務付けられていた。しかし、その本数は、年間数万本に過ぎず、伐採数にはとても及ばなかった。

また植林に対する考え方も、あくまで別子銅山の薪炭確保のためであった。

しかし貞剛は違った。貞剛は、山を自然に戻すという考え方に立った植林を行おうとしていた。

それは住友のためではない。自分たちの利益を優先し破壊し尽くした自然に謝罪し、元通りにする植林だった。住友の利益を度外視したのだ。

「このまま別子の山を荒蕪こうぶするに任せておくことは、天地の大道に背くものである。どうにかして濫伐らんぱつのあとを償い、別子全山を旧もとの青々とした姿にして、これを大自然に返さなければならない」という言葉に、貞剛の考え方が全て表れている。

貞剛は、山林課長の本荘を執務室に呼んだ。

「年間に百万本以上の植林を行う」

貞剛は言った。

本荘は目を丸くし、心底驚いたが、すぐに破顔し、貞剛に握手を求めてきた。本荘はかねてから大規模植林を上申していたのだ。

実は、自然復元という壮大な計画の他に、もう一つ、貞剛には、植林を早急に進めなければならぬ事情があった。

それは明治政府の林野行政の転換が迫っているとの情報を得ていたからだ。

幕末の戊辰戦争以来の友人である品川弥二郎やじろうは山林局長などを務め、日本の森や農地のある自然環境を守るという強い意志を持つ

ていた。

「日本の森は日本の財産である。国有にして民間の濫伐から守らねばならない」

これが品川の考えだった。貞剛は度々このことを品川から聞かされていた。

「本荘さん、別子の山をこのまま荒れるままにしておいたら、いずれ国に取り上げられてしまいますぞ。もう住友なんぞに任せられないと言われてしまいます」

貞剛は本荘に言った。

「支配人のおっしゃる通りだと思います」

本荘は、貞剛の危機感を本物であると受け止めた。

「植林の方法を検討してくれ」

貞剛の指示を受けた、本荘ら山林課は、奈良県吉野地方からヒノキ、杉の苗を仕入れ、吉野式造林法を採用することにした。

日本有数の美林と言われる吉野杉を育てた造林法である。

ヒノキや杉を高密度で植林し、間伐を多く繰り返し、百年という長い視野で木を育てるもので、長伐期多間伐施業方式と言われる。

「小吉、百年後にはこの山は見事な森になっているからな」

貞剛は、小吉の頭を撫でた。

「百年後かあ。おいらも爺じいさんになっているね。生きているのかな」

小吉が貞剛を見上げて言った。

「そうだなあ。小吉も結婚し、子どもができ、その子供が美しい森を見て、これは小吉爺さんが造った森だと誇りに思うかもしれない」

貞剛は優しく微笑んだ。目の前には大勢の人たちが植林を行っている姿が見える。

貞剛には夢があった。今は、住友が雇い入れた人たちで植林を行っているが、いずれは別子銅山で働く人たちや村の人たちが、楽しみながら植林事業に参加してもらうことだ。木を植え、育てること、百年計画でやらねばならない。百年先の未来を夢みることだ。

「おじさん、何を嬉しそうに笑っているの」

小吉が聞く。

「百年先の美しい森の景色を見ていたんだよ」

貞剛は言った。

その時、ふいに幸平の顔が浮かんだ。

大島の問題を最終決着させるために、幸平に友純からの依頼解雇の辞令を見せた時の、怒りを爆発させた顔だ。

*

貞剛は、友純の意を受け、新居浜の幸平邸に来ていた。

おもや
母屋二階の望煙楼ぼうえんろうで幸平を待つ。広大な幸平邸の中で、ここだけはそれほど広くなく落ち着く。

煙を望むと名付けられているように、この部屋からは新居浜にある住友の精錬所の煙が立ち昇るのを眺めることができる。

貞剛は、ガラス障子を開ける。晩秋の空は、青く、高く澄み切っている。風が吹き上がってくる。すでに冬の気配を含んでいるのだろうか。肌に冷たい。

「貞剛、いい景色だろう」

背後から声がした。貞剛が振り返ると、幸平がいた。

「はい。新居浜の海が良く見えます」

「ワシは、用事がない時は、日がな一日、ここから新居浜を眺めているんだ。製鉄所や精錬所からの煙を見ると、なんとも心地が良い」

「いい眺めですね」

「今日は、何の用事だ。またワシに辞めろという話か？ あの家長の友純様はどうも見込み違いだ。辛抱しんぼうがない。あんな大島おおしまごとき虚うつつけ者にいいように乗せられておる。あんな奴の戯言たわごとなど、放っておけばよい。どうせ金目当てじゃ。金でも渡して黙らせろ。そうではないか。貞剛」

室内に響き渡る幸平の声。

貞剛は、何も言わず座敷の真ん中にある座卓に就く。幸平も貞剛の前に座った。

「叔父さん」

貞剛は、幸平のことを総理人と呼ばずに「叔父さん」と親しみを込めて呼んだ。

幸平の表情が、一瞬の戸惑いの後、綻ほころんだ。故郷、近江おうみの国に戻ったような気持ちになったのだろうか。

「大島との問題は、一住友の問題を超えて、西園寺公を始め、政府のご要人の方々まで悩ますことになっております」

「そんなこと分かっておる。西園寺公も、ワシに辞めろと言う。住友家に傷がつくなどと言う。あのお方になんの権限がある。養子で迎えた友純様の叔父上というだけではないか。ワシは、この住友を守り、育ててきたんだ。歴代の家長など、何もせずに酔っぱらい、遊んでいただけではないか。ワシが、全てを取り仕切り、全てやってきた。この別子だって住友家は、売っぱらおうとしたんだぞ。それを防ぎ、今日の繁栄を築いたのはワシだ。こんなことは子どもだって知っている。貞剛だって知っているだろう。それならば、大島を取るのか、ワシを取るのか、考えなくとも分かるはずだ。それを世間体が悪いからと、辞めろ、辞めろの大合唱だ。いい加減にせいと言いたい」

幸平は、口角泡を飛ばす勢いで話す。唾が貞剛のところまで飛んでくる。

「承知しています。しかし……」

貞剛は、ぐっと睨む。

「しかし……。しかし、なんだ」

幸平の表情が険しくなる。貞剛は身内だ。身内の者に非難されることは、幸平には我慢ならない。

「これを預かって参りました。正式には、友純様からのご手交になります」

貞剛は、座卓に「依頼解雇」の辞令を置いた。

幸平は辞令を手に取ると、みるみる顔を赤らめた。額に血管が浮き上がる。

「これを友純様自らがお書きになったのか」

幸平が貞剛を睨む。目の玉が飛び出るような形相だ。

「お書きになりました」

貞剛は、感情を交えず答える。

「むむむ、貞剛……」

幸平は、奥歯が折れそうなほど強く噛みしめる。ぎりぎりという音が、唇の間から漏れてくる。

感情のおもむくままに、辞令を破ろうとする。

「叔父さん、破ってはなりません。家長がお書きになったものです」

貞剛が止める。

「家長など、飾りだ。ワシが住友だ」

幸平は、あおいあせ脂汗を流しながら、荒い息を吐き、辞令を座卓に置く。

幸平の手のひらが座卓を打つ、激しい音がした。

「友純様のご意思です。尊重していただきたいと思います」

「貞剛、お前まで弓を引くのか。お前を取り立ててやったのはワシだぞ」

「承知しております。感謝しております」

貞剛は、体を幸平に寄せた。

「お前のような裏切り者から、叔父さんなどと気楽に呼ばれとうな
いわ」

幸平は、憎しみを込めて貞剛をのしる。

「それでは総理人と呼ばせていただきます。総理人のことを尊敬し、感謝していません。住友の人間はおりません。誰もが総理人の功績を認めております。しかし大島の問題に象徴的に表れておりますが、別子の従業員、坑夫、そして農民たちの離反、煙害など多くの問題が発生しております。それらは新しい経営陣が新しい発想でやらねば、解決しません。誰もが総理人の偉大さに遠慮し、そんたくお考えを付度し、口をつぐんでおります。このままでは住友家の名前に傷がつくだけ

でなく、総理人が最も愛し、これまでその発展に献身されてきた別子銅山の経営も立ち行かなくなつて参ります。この際、ご勇退を決断されることをお願い申し上げます」

貞剛は座卓を離れ、座布団を脇にどけると、額を畳に擦り付けんばかりに腰を折つた。

そして顔を上げ、「叔父さん」と言った。「晩節を汚すことだけはお避けくださいませ」貞剛は再び低頭し、そのままじつと待った。

幸平が、「ううう」と小さく唸^{うな}る声だけが聞こえてくる。

「後は、お前がやるのか」

幸平は聞く。

「それは分かりません」

貞剛は、顔を上げた。

「こんな仕打ちが、最後に待つていようとは、悔しくて、腹立たしくて、どのような言葉を尽くしても尽くしきれんわ」

幸平は天井を仰いだ。目の辺りに光るものが見える。涙であろうか。

「申し訳ございません。しかし、これも総理人が生涯をかけて育てられた住友のためであります」

「後は、お前がやれ。貞剛、ワシの名を汚すな」

「過分なお言葉です。もし、私が総理人の後を継ぐことになつたと

しても、私は長く務めるつもりはございません。本日、このように総理人に弓を引いた身でありますから。総理人のなされたことの仕上げだけを務めさせていただきます」

貞剛は幸平を見据えた。

「ワシは、今回のこと、納得したわけではない。大島ごときに負けたわけではない。しかし友純様のご意思とあれば、仕方がない。身を引くと申し上げてくれないか。正式なご沙汰を心待ちにしているとな」

幸平は、言葉を噛みしめるように言った。一語、一語を発する度に心を鎮めているかのようにだ。

「承知いたしました」

貞剛は再び低頭した。

幸平が、正式に友純から「依頼解雇」の書を渡され、総理人を辞任したのは、明治二十七年十一月十五日のことだった。

*

「おじさん、おじさん」

小吉が何度も呼び掛けている。

「おお、どうかしたか、小吉」

貞剛は、やっと我に返った。

「もうお昼だよ。姉ちゃんが作ってくれたおむすびを食べようって、みんながあっちで待ってるよ」

小吉が指さす方向には、お光や本荘たち別子銅山の職員たちが座っていた。皆、明るい顔だ。

「支配人様！ 早くしないと全部、食べられてしまいますよ」

お光が、手を振っている。

「おお、今、行くぞ」

貞剛は、手についた土を手拭いで払い落とした。

6

貞剛が、別子銅山支配人に就任して以来、義務付けていることがある。

それはできるだけ山に住み、かんきこう 歓喜坑などの坑道に出かけ、人々に声をかけ続けること。

新居浜にいる時は、支配人宅を出て歩きながら村の人々にあいさつ挨拶をすること。そして鉱山鉄道は極力利用しないで山へ登ること。

なぜ歩くのか。理由があるようで、ない。というより自分でも理

屈があつて行っていることではない。

別子銅山を経営している住友と、銅山で働く坑夫やその家族、煙害で苦しむ村の人々との間に言葉が通じなくなっていることが問題である。

「愚」になれと峯山は言った。何も求めず「愚」になれば、言葉が通じるようになるのだろうか。

——いけない、いけない。何も求めずと言いながら、結果を求めている。

貞剛は矛盾に恥じ入る気持ちになる。

「虫がいる」と貞剛は、品川に手紙で書き送った。いつの間にか虫がそれぞれの関係を喰い散らかし、悪化させてしまっている。虫を退治するためには、どんな方法がいいのだろうか。貞剛は、真剣に悩んだ。

殺虫剤という強力な薬剤を散布すればいいのだろうか。すなわち、不満分子などを徹底的に排除したり、村の人々に金を与え、文句を言わせなくする手段だ。

しかしそれでは何も解決しない。殺虫剤に抵抗力を持った虫に喰われるだけになる。

貞剛は『臨濟録』を読んでいた。この書は難しく、内容がなかなか理解できない。

ある日、「無事は貴人」という言葉が、文字通り目に飛び込んできた。その途端に、目の前に光が差ししてきた。ありとあらゆるものが輝きを帯び始めたのだ。いったいどうしたことかと目をこすった。

「無事は貴人。但莫造作。祇是平常（無事これ貴人。ただ造作することなかれ。ただこれ平常なり）」

老子は無為を為すとな言った。道を究めるとは自然のままであることだという意味であろう。

『臨濟録』も同じ意味だろう。余計なことをするな。ただあるがままが良い。何かを企んだり、仕掛けたりしてはならない。平常であることが尊いのだ。

この瞬間に、貞剛は歩くことを決意した。とにかく何も謀ることなく、何も求めず、ただ歩くだけだ。これが峩山の言う「愚」なのかもしれない。

村の中を歩き、山に向かう。人々は警戒し、奇異な目で見る。中には、枯れた稲や麦を握りしめて、怒鳴ってくる者もいる。

しかし、ただ歩き続ける。文句を言ってくる者にも、挨拶をしてくる者にも、返すのは等しく微笑みだけだ。

銅山に到着し、目出度町めつたまちの賑わいにぎの中を歩く。歓喜坑やかんとうこう歓東坑などの坑道に行く。そこでは座って坑夫たちが坑道に入っていくのを眺めている。

坑夫たちが怪訝けげんそうな顔で貞剛を眺めていく。中には、支配人様ですかと声をかける者もいる。その時は、はい、ご苦労様です、と笑みを浮かべる。すると、長兵衛です、と自己紹介をしってくる。その後は、その坑夫に会えば、長兵衛さん、おはようございますと挨拶をする。

昼になれば、その場でお光が作ってくれた握り飯を頬張る。ただそれだけだ。

あの支配人おかしんじゃないか。何もしないで高い給料を取りやがって。一日、ぼんやり座っているだけじゃないか。なんでも新居浜から歩いてお山に登ってきたらしいぜ。それも毎日のことらしい。そりゃ、ご苦労なことだ。お偉いさんだったら鉄道に乗らないのかね。あんな無能な支配人を送り込んできて住友はどうかしたんじゃないのか。

不思議なことに、聞き耳も立てないのに人々の声が聞こえてくる。坐禅ざぜんというのは、何も寺だけでやることではない。ここで握り飯を食べながら、澄み切った別子の空を眺めているだけでも坐禅のように、心が静まってくる。どんな雑音あざわね、嘲りあざわねなどが聞こえようと、心が騒ぐことがなくなってきた。

妻の梅子が新居浜に来了。その時も貞剛は、変わらず山に歩いて登った。不思議に思った梅子は、「あなたは毎日、いったい何をなさ

っているのですか」と尋ねた。貞剛はただ笑って、「釣瓶つるべの稽古きこだな。毎日、あがったり、さがったり」とだけ答えた。梅子はあきれ顔で「虚うつけも、そこまで徹底すると偉いものだわね」と感心した。翌日、梅子は貞剛に弁当を持たせ、黙々と山に向かって歩く貞剛を見送った。

別子の冬は寒く、雪に見舞われる。坑夫たちも春の到来まで仕事を休むことになる。しかし貞剛は、そんな時季でも山に登った。食料など生活物資を運ぶ人たちに助けられながら山に登る。草鞋わらじが擦り切れると、雪が足に付着し、指先が痛いほど冷たくなる。それでも貞剛は歩いた。

銅山の支配人宅に滞在している時も坑夫たちが生活している場所に歩いて行き、声を掛けられればにこやかに笑顔で話に加わったのである。

貞剛が、あまりにも銅山を歩くので、いつもはしかめ面で書類を見てばかりいた銅山の従業員たちも、いつの間にか外を歩き始めた。そしてどちらからともなく従業員と坑夫たちが声を掛け合い、笑い合うようになってきた。

ある日、貞剛は小足谷こあしたに小学校に向かっていた。

住友は、別子銅山で働く従業員の子弟教育に早くから力を注いでいた。この小学校は明治六年（一八七三年）に目度町に開校され、

その後明治二十二年（一八八九年）に小足谷に移転した。約三〇〇名近い生徒たちが熱心に学んでいる。新居浜の小学校より先生が良いいということ、わざわざこの小学校で学ばせたいと依頼してくる父兄もいるほどだった。

貞剛は、この小学校で学んでいる小吉たちに授業をするためにやってきた。

以前、ここでは住友の従業員の子弟のみ学んでいた。しかしある冬の夜のことだった。貞剛は、銅山の支配人宅で本を読んでいた。すると、入り口の戸を叩く音がする。夜も遅い。九時を過ぎ外は真っ暗だが、雪が積もり、それに月明かりが反映し、ほの明るい。

誰かと思つて戸を開けると、そこに小吉と、両親が申し訳なさそうに立っていた。

「どうしましたか。さあ、中にお入りなさい。寒いでしょう。何も無いが、熱い茶くらいは出しましょう」

貞剛は、三人を中に招き入れた。「どうぞ、お上がりなさい。そこでは寒い」

両親は、小吉を間にして土間に立ったままだ。冬だというのに薄着だ。

「いえ、私たちはここで結構です。座敷にあがるような身分ではありませんので」

父親が言う。無精ひげが伸びてはいるが決して不潔ではない。少し怯おびえたように見えるが、誠実な印象の目をしている。母親は、お光とよく似て目鼻立ちが整った上品な顔だ。

貞剛がいくら勧めても座敷に上がらないため、貞剛は仕方なく火鉢を持ってきて、土間近くの床に置いた。

「せめて火鉢で暖まりなさい」

貞剛は言った。

父親は躊躇ちゆうちよしていたが、ようやく火鉢の周りの床に腰を掛けた。父親が座ると、その後ろに小吉と母親が座った。

「さて、こんな夜分に何事ですか？」

貞剛は父親に聞いた。

父親は、母親と顔を見合わすと、意を決したような真剣さで、「お願いがありました……失礼を承知で参りました」と言った。

「なんででしょうか？ 小吉がいるところを見ると、小吉のことですね」

貞剛の言葉に、小吉の表情が、一瞬、明るくなった。

「その通りです。お願いといえますのは、小吉を小学校に入れてくださらないかということです。無理なことは重々承知です。私たちが流れの坑夫は、明日はどこに行くか分からない身です。それで小吉は小足谷小学校には入れません。しかし小吉の将来を考えますと、

ぜひ勉強をさせたいと思ひまして……。小吉もそれを強く望むものですから」

父親は、言葉を選びながら話す。そして貞剛を見つめ、小さく頭を下げた。

「小吉」

貞剛は、父親の背後に隠れて、神妙にしている小吉に声をかけた。

「はい。おじさん」

小吉は言った。

「こら、おじさんではありません」

母親が怒った。

「いや、良いのです。私と小吉の間はおじさんで良いのです。小学校へ行きたいのか」

「はい」

小吉は元気よく返事をする。

「お父さん、お母さん、私の方こそ謝ります。皆さんのお子さんが学校に行っていないとは気づきませんでした。明日、すぐに手続きをして、他にもお仲間で小学校に通いたいというお子さんがいれば、入学を許可します」

貞剛は言った。

「本当、おじさん」

小吉が、父親の背後から顔を出した。その顔は喜びに溢れている。

「本当だよ。しっかりと勉強をしなさい」

貞剛が優しく言った。

「ありがとうございます」

父親と母親が何度も頭を下げる。

「ああ、それから費用のことは心配しなくてよろしいですから。そのこともお仲間にお伝えください」

貞剛の言葉に、父親と母親は顔を見合わせ、ほっとしたような顔をした。

貧しさのせいで教育の機会を失わせてはいけない。山の木を育てるのと同じくらい人を育てるのは重要である。これは貞剛の信念でもあった。

小吉を小学校に入学させたことで、貞剛が住友の従業員であろうと、坑夫であろうと、差別しないという評判が立った。すると、今までは銅山を歩いても冷ややかな空気を感じていたが、それが一変した。貞剛を見る視線が優しくなり、声をかけてくる者も増えてきた。

貞剛は、小吉に感謝した。これで虫の何匹かを退治できたかもしれない。誰もが求めているのは、公平な扱いということだ。人事において宰平が親族を優遇するという不公平に不満が溜まっていたの

だが、それが少し払拭できたかもしれない。小学校には、小吉の他に多くの坑夫の子弟が入学した。

校庭に貞剛が現れると、校長が飛んできた。

「支配人様、本日はご足労をおかけします。子どもたちが支配人様の授業を受けたいというものですから」

校長は、冷や汗を拭いながら頭を何度も下げる。

「なんのなんの、私も良い機会ですから。楽しみです」

貞剛は言う。

教室に案内されると、そこには大勢の子どもたちがいた。貞剛に向かつて一斉に拍手をする。ひとときわ一生懸命に手を叩いているのは小吉だ。貞剛は、小吉に目配せした。小吉も笑顔を返した。

貞剛が教えるのは、論語だ。貞剛は教壇に立ち、子どもたちを見渡す。皆、教科書を広げて貞剛の言葉を待っている。

「子、のたまわく、学びて時にこれをしならう……」

貞剛の言葉に合わせて、子どもたちが大きな声で復唱する。貞剛は、嬉しくてたまらない。彼らから、エネルギーをもらっている実感がする。この時ほど別子銅山に来てよかったと思ったことはなかった。

ある時は、坑夫の案内で歓喜坑にも入った。

「こんなシキ（坑道）に入りたいと言った、もの好きな支配人はい

ませんよ」

坑道内を案内してくれるのは小吉の父親だ。

入ってみると、すぐに暗くなった。灯は腰に提げたカンテラだけだ。掘りだした鉱石を運び出すトロツコ用の線路に沿って慎重に歩く。足元がおぼつかない。水があるのだろう。歩きたびに水音がし、足が濡れていく。振り向くと、入ってきた入り口が小さく丸く光っている。だんだんと天井が低くなる。天井からは水滴が落ちてくる。小吉の父親の腰でゆらゆらと揺れるカンテラの明かりを頼りについていく。広いところに出た。薄暗い電灯がついている。看板が掛けられていて見張り所と書いてある。

「ここは坑夫の出入りを管理するところです」

二人の男が、椅子に座っている。

「支配人様だよ」

小吉の父親が言う。

二人は、慌てて立ち上がるが、天井で頭を打たないように、やや前かがみになっている。

「ここを過ぎると、急に天井が低くなっていますので気を付けてください。地獄の一丁目などと言う奴もいます。なにせ光なんぞ全く届きませんから。頼りはこのカンテラだけです」

小吉の父親が腹ばいになる。恐怖心すら感じるほど狭い穴を潜り

抜けると、また広いところに出た。鎚つちと鑿のみで壁を削っている男がいる。坑道の中は暑い。貞剛の額から汗がしたたり落ちてくる。鎚と鑿を振るう男は上半身裸だ。鑿の音が坑道内に響く。男は、一心不乱に鎚を振り上げている。腰のカンテラが男の黒光りする体を照らす。貞剛はあまりの神々しさに思わず手を合わせた。

支配人自らが坑道の奥深くに入ったという話は、すぐに別子銅山中に広まった。

それ以来、貞剛とすれ違う坑夫たちの視線に親しみがこもってきたのである。彼らは、貞剛を仲間だと認めたのだろう。

貞剛は、「無事は貴人」の臨済の言葉を心に繰り返しつつ、まるで修行のように銅山を歩き続けた。

その一方で、未来の住友のために着々と布石を打ちつつあったのである。

〈つづく〉